

齊藤 日出治

空間的身体の発見

コンメンタール『空間の生産』

はじめに 都市革命論の空間論的旋回

アンリ・ルフェーヴルはなぜ『空間の生産』[1974]を執筆したのであるか¹⁾。本書に先立つルフェーヴルの主要な研究テーマは、周知のように、日常生活批判であり、都市革命論であった。前者の日常生活批判は、一九三三―一九八八年という五〇数年の長期にわたる研究で、かれの研究生活の深部に通奏低音のようにして流れる超テーマであるが、後者の都市革命論は、ルフェーヴルがナンテール大学（パリ第一〇大学）に移った一九六六―一九七三年の一〇年足らずの短期間に集中して取り組まれたテーマであった。前者は、近代とは何かという哲学的テーマをひとつの日常生活のありようから問い直そうとするところみであり、後者はその近代への問いが都市空間に焦点を当てて取り組まれた仕事であった。

日常生活批判は、第二次大戦前の一九三〇年代における「神

秘化 mystification」の研究（ノルベール・ギュテルマンとの共著『神秘化―日常生活批判のためのノート』一九三三年）に始まり、一九四七年の『日常生活批判 序文』第一巻、一九六一年の『日常生活批判―日常性の社会学の基礎』第二巻、一九六八年の『現代世界における日常生活』、一九八一年の『日常生活批判』第三巻へと続いた。

だが、第二次大戦後のいわゆる先進諸国の経済成長とともに、日常生活の総体が資本の蓄積過程に包摂されつくすことによつて、日常生活が抱える矛盾が都市の反乱となつて炸裂する。この動きに着目したルフェーヴルは、日常生活批判を都市革命論として展開し、その活路を（都市への権利）に求める。一九六八年の学生・労働者の五月反乱は、この都市革命が頂点に達した出来事であった。

都市革命論に没頭したルフェーヴルは、一九六六年に『パリ・コミュニケーション』、一九六八年に『都市への権利』、一九七〇年

に『農村から都市へ』、『都市革命』、一九七二年に『マルクス主義思想と都市』、一九七三年に『都市への権利』第二版、一九七三年に『空間と政治』、そして一九七四年に『空間の生産』と、わずか一〇年足らずの間に精力的な執筆をおこなった。

だが注意する必要がある。ルフェーヴルが都市に着目するのは、逆説的なことであるが、この時期に都市が発展したためではない。むしろ都市が衰退したためである。ルフェーヴルが一九六〇年代のフランス都市について「確認したのは、都市がいたるところで衰退しつつあるということであった」（レミ・エス『空間の生産』第四版まえがき、邦訳二二頁）。都市はなぜ衰退しつつあったのか。都市は交換価値としては飛躍的に発展する。都市は、産業の生産活動を驚異的に発展させ、資本の価値増殖の運動をかぎりなく推進する。だが、この交換価値の発展が使用価値としての都市をかぎりなく衰退させる。この時期に、都市は住民の生きる力を、社会を創造する能力を、極度に減退させた。都市住民の「住まう habitier」という能力が衰退し、代わって商品化された「住宅 logement」が増殖する。かつてのヨーロッパの古代都市および中世都市は、都市の全体が芸術作品としてなりたち、都市住民の自治能力が町並みや市場や建築物に表現されていた。そのような都市の「住まう」能力が、一九六〇年代の産業都市の飛躍的発展のなかで急速に失われていく。ルフェーヴルが察知したのは、交換価値（商品）

としての都市の発展と、使用価値（作品）としての都市の衰退というパラドクスであった。

だが、都市住民のこの「住まう」能力の衰退は、たんに工業生産や商業取引の発展によって自然発生的、かつ事後的に引き起こされただけではない。都市行政、科学的認識（数学、情報科学、政治学、人口統計学、土木学、都市工学、地理学など）が都市の領域に積極的に介入して、都市の空間を政治的に組織しようとする。つまり「都市領域は、政治的戦略と密接に結びついた認識の戦略をひきおこす」（レミ・エス、同、邦訳二二頁）。都市行政と科学的知識と資本の運動が、互いに手を携えて、都市の領域に都市開発、あるいは都市計画という政治戦略を行使する。この政治戦略が、都市住民の「住まう」能力を急速に減衰させたのである。

このような国家と資本による都市への介入を、ルフェーヴルは都市住民による使用価値にもとづいた都市再生の契機へと反転させようとする。これが「都市革命」のテーゼとして結実する。

だから、ルフェーヴルにとって〈都市への権利〉という都市革命論は、都市の空間への政治的介入という政治戦略への対抗戦略として提起されたものにほかならない。都市の空間が科学的認識の対象となり、「空間の科学」が出現し、「空間の言説」を媒介にした都市計画、都市開発が推進される。だから

フエーヴルが一七九三年に『空間の政治』を執筆したときに、すでに〈空間の生産〉というテーマは構想されていたと言える。都市領域が政治的争点となり、国家と資本が提示する科学的知を媒介にした集権的な都市開発戦略に対抗して、都市住民による都市の分権的な自己管理の戦略が提示される。ルフエーヴルは一九六六―一九七三年に、アテネ、テヘラン、オタワ、京都、ニューヨーク、モントリオール、アルジェリア、ユトレヒト、ワルシャワ、ブリュッセル、オラン（アルジェリア北西部の港湾都市）といった世界各地の都市を訪問し、そこにフランス諸都市と同じような都市の転換と都市革命への可能性を確認した。そのなかで、ルフエーヴルは、都市革命論で提示した資本と国家による都市開発戦略とそれに対抗する都市住民の都市の自己管理戦略とのヘゲモニー闘争が、社会空間をめぐって展開しつつあることに気づくようになる。こうして、都市革命のテーゼは空間革命のテーゼとして深化されるのである。

だが、ルフエーヴルが〈空間の生産〉という視座から自身の都市革命論を再考するに当たって、それまでの都市革命論では明示されなかった新しい座標軸が設定されていることを見逃してはならない。かれは『空間の生産』の最終章「開口部とその結論」において、〈空間の生産〉を論ずる知の地平を「メタ哲学」と名付ける。「メタ哲学」とは何か。それは、思弁哲学を社会的実践や政治批判にさらすことだ、ルフエーヴルはこう語

る。だがそのかぎりでは、ルフエーヴルはすでに日常生活批判および都市革命論において、思弁哲学を社会的実践の視点から批判し、政治批判にさらすしてきた。

では、〈空間の生産〉に「メタ哲学」の視座からアプローチすることにどのような独自性が見いだされるのであろうか。そのことを考えるヒントになるのは、ルフエーヴルがメタ哲学の先駆者としてマルクスとニーチェを挙げていることである。ルフエーヴルはメタ哲学の実践的事例として、「マルクスの社会的実践にもとづく批判」および「ニーチェの芸術（音楽・詩・演劇）にもとづく批判」を挙げ、両者の批判のいずれもが「(物質的)身体」(Lefebvre H.[1974] 邦訳五八〇頁)にもとづいている、と語る。つまり、ルフエーヴルは、本書において、身体所作と空間の生産とを不可分一体のものにとらえ、その両者の関係を「空間的身体」として問いつつ、その視座から自身がこれまで展開してきた日常生活批判と都市革命論を定位し直そうとしたのである。

ルフエーヴルが〈空間の生産〉というテーマを設定した重要な契機として、空間が科学的に認識され、その科学的認識を媒介にして技術者、建築家、行政官僚が都市空間の生産に積極的な介入を図ったことが挙げられる。すでに言及したように、この視座がきわめて重要であることは言うまでもない。だが、ルフエーヴルにとっては、そのような〈空間の生産〉こそ、使用

価値としての都市を衰退させた原因であり、そのような〈空間の生産〉のしかたを根源で規定しているのは、身体的実践、あるいは生きられる経験による空間の生産であった。この視座から空間の諸科学および都市行政による空間の生産を批判し、生きられる経験による空間の生産の復権を図ること、これが〈空間の生産〉のメイン・テーマであった。

身体の所作を抜きにして空間はないし、空間を生産することなくして身体はない。このような空間の生産の地平設定が知の広大な領野を開示することになる。つまり、空間の政治を問うたルフエーヴルは、同時に身体を政治を問うたのであり、空間の生産を問うたルフエーヴルは身体を生産を問うていたのである^[2]。

こうして、〈都市への権利〉を〈空間への権利〉へと定位し直し、都市革命論を空間革命論として再提示するための言説として『空間の生産』が誕生する。ルフエーヴルは大学退職の年に、退職を一年引き延ばす猶予願いを出して、本書の執筆に専念するが、このルフエーヴルの執着は、〈空間の生産〉というテーマがかれの全生涯をかけた日常生活批判、および都市革命論を空間的身体論の視座から集大成するものであったからにはかならない^[3]。

一 空間概念と生産概念の問い直し

〈空間を生産する〉とはどういうことなのか。空間は物が生産されるのと同じようにして生産される、ということなのであるか。ルフエーヴルは、一面でそのような意味であることを認めている。だがそれだけではない。空間は所与の枠組みのよなものとしてあるのではなく、生命体の活動やひとひとの社会的な諸関係を通してかたちづくられていくものである。生命体の活動や社会的な諸関係は、空間をかたちづくることによつてはじめてみずから実現する。それらは空間と不可分一体の関係にあるのだ。さらに、空間は映像や音楽や身ぶりによつて多様なかたちで表象され表現される。時間さえもが空間に入り込む。未来や過去は空間のなかに姿を現わす。映像、音、身ぶり、時間を表象する営みのすべてが空間の生産にふくまれる^[4]。

したがって、〈空間の生産〉について語るとき、空間という言葉が通常の意味を超えるだけでなく、生産という言葉も通常の意味を超える。『空間の生産』におけるルフエーヴルの真意は、〈空間〉と〈生産〉の双方の概念を問い直すところにある。空間概念を再審することが、不可避免的に生産概念の再審を呼び起こすのである。

ルフエーヴルはマルクスとエンゲルスが〈生産〉を二重の意

味で使っている、と言う。人間が「みずからの生活・歴史・意識・世界を生産する」(ibid.:邦訳一二三頁)という広義の意味と、商品や貨幣や資本といった生産物を生産する、という狭義の意味がそれである。前者の生産には、人間の創造する能力、考案する能力、表象する能力がふくまれる。だが、後者の生産は人間の活動が〈労働〉に限定される。つまり、ルフェーヴルは人間の生産活動を、認識活動、音や映像の生産、言語活動といった広義の意味と、労働という狭義の意味で二重にとらえていることがわかる。そして前者の生産活動の成果を「作品」と呼び、後者の労働の成果を「生産物」と呼ぶ。

では、作品と生産物はどうちがうのだろうか。ルフェーヴルによれば、前者は「置き換えられないもの、特異なもの」であり、後者は「反復可能なものであり、反復的な身ぶりや行為から生じてくるもの」(ibid.:邦訳一二五頁)である。ハンナ・アーレントは、生きるための苦役としての労働と、芸術作品をつくる仕事を区別したが、作品の生産と生産物の生産の双方をふくみこんだルフェーヴルの「空間の生産」概念には、アーレントの言う労働と仕事の双方の意味がともに込められていることがわかる。空間の概念には、作品としての空間と生産物としての空間が、生産の概念には、仕事と労働がともにふくまれるのである。

「人間」は、つまり社会的実践は、作品を創造し、ものを生

産する」(ibid.:邦訳一二七頁)。ただし、この両者は相互に不可分に入り交じる。人間の労働は作品の創造にも、ものの生産にもかかわる。ただし、作品の生産において労働の果たす役割は小さく、ものの生産においては労働が支配的な役割を果たす。だから、ルフェーヴルにとって、作品と生産物は厳密に区別されるものではない。同じように、作品を創造する活動と、ものを生産する活動(労働)も、厳密に区別しえない。

ルフェーヴルは、それまで日常生活批判、都市革命論を論ずる場合に、作品と生産物を厳密に区別し対比した。たとえば、一九六二年に刊行された『現代への序説』で、ルフェーヴルは、自らが住む古き町ナヴァランと、工業化とともに生まれた新しき町ムランを対比して、前者を〈芸術作品〉として、後者を〈技術品〉としてとらえる。ナヴァランの町は、町の諸組織が長期にわたってゆっくりと分泌され、歴史と文化の厚みがそこに凝集されている。ここでは、町のどの部分もたがいに調和のとれた関係を保つ。教会の鐘の音、街路や町の景観がみごとに溶け合い、どの町並みも、どの家も、傑作であり、芸術作品である。

これに対して、ムランの町は、技術品のように、すべてのものが象徴的な統一性を失って、たがいに切り離され、さらにその切り離された各部分が機能的に統一される。ムランに建てられているアパートは「住む機械」のようであり、町の区画や道

路や工場は、信号表示の体系に組み込まれ、一義的な行動を指示したり禁じたりする機能的なシステムと化している。

芸術作品としての都市と技術品としての都市は、このようにはつきりと区分けされ、前者の都市から後者の都市が批判的に省察される。これが、ルフェーヴルが都市革命を論ずる基本的な視座であった。

これに対して、『空間の生産』においては、このような二分法が斥けられて、むしろ作品と生産物の弁証法的運動が強調されるようになる。ルフェーヴルは一六世紀の中世都市ヴェニス为例に挙げて、この洗練された都市が芸術作品のように生産されたものとみなすのは、「作品の概念を過度に物神化してはいないであろうか」(同、一三三頁)、と疑問を投げかける。作品を生産物に対して卓越した関係に置くことはできるのか、と。

「ヴェニスはたしかに特異な素晴らしい空間である。だがそれは芸術作品なのであるか」(ibid. 邦訳一三三頁)、と。それは、芸術作品のようにあらかじめ構想されたものが実現されたわけではない、という意味において芸術作品とは言えない。だが他方で、ルフェーヴルはこうも言う。ヴェニスの作品性は、港湾や水路の建設、壮大な式典、建築といったひとびとの社会的労働に支えられている、という意味において、まぎれもなく生産されたものである、と。

だから、「作品と生産物を引き続き区別することが重要であ

るとしても、この両者の区別はまったく相対的なもの」であり、この両者に「いかなる関係が存在するのかを問う」(ibid. 邦訳一三四頁)ことが重要なのだ、と語る。むしろ作品と生産物はそのも切り離せないものであり、両者は一体のものとして論じられるべきだ、と。

「作品と生産物が区別されるのは、回顧的分析⁵⁾を通してだけである。作品と生産物を完全に切り離すこと、両者の間にはつきりとした切断を入れること、それは発生しつつある運動を破壊することに等しい」(ibid. 邦訳一三七頁)。

回顧分析を通して、作品と生産物の関係の発生史をたどるとは、同時にこの関係がしだいに変質していく過程をたどることでもある。ヴェニスの歴史は、作品と生産物との関係において、しだいに反復性の身ぶりが固有性の身ぶりを圧倒し、生産物が作品を支配していく過程としてたどられる。

「嘆かわしいことに、反復性がいたるところで固有性をうち負かし、人為的なものやかりごとが自然発生性と自然性を追いついて、それゆえ生産物が作品を圧倒した」(ibid. 邦訳一三二頁)。

要するに、ルフェーヴルが着目するのは、ヴェニスの都市が作品であるか生産物であるかということなのではない。そうではなく、この作品と生産物の両者の特異な関係によって新しい空間が生産された、ということなのである。ルフェーヴルはこ

の新しい空間の生産を、「視覚的遠近法」という空間の新しい表象の出現によって確認する。「水平線や消点」ものが見えなくなる最後の一点」をともなった均質的で、境界を定められた空間」(ibid. 邦訳、一三七頁) という新しい〈空間の表象〉が出現したのである。

ここに〈空間の生産〉のプロブレマティクが明らかとなる。生産物も作品も、都市も農村も、そしてそれらの相互の関係も、ともに新しい空間の生産において問い直される、これこそルフェーヴルが〈空間の生産〉において語ろうとしたことなのである。

作品と生産物の関係が空間の生産において問われるということとは、作品の生産と生産物の生産が、ともに空間との関係において問われるということの意味する。つまり、生産という活動は、作品および生産物と不可分にかかわるだけでなく、空間そのものと不可分に関わる。それは、生産という概念が空間の概念なしにありえないということの意味する。だから、ルフェーヴルはこう言う。「社会空間の概念は、・生産の概念に徐々に入りこみ、生産の概念をむしろ含むことさえある」(ibid. 邦訳一四五頁)、と。こうして、社会空間は、「生産概念の本質的な部分になる」(ibid. 邦訳一四五頁)、ルフェーヴルはこう言い切る。空間が生産なしにありえないように、生産も空間なしにはありえないのだ。

空間と生産を一体視するこの認識は、唯物史観の定式に根本的な再考を促す。生産諸力と生産諸関係(所有諸関係)、土台と上部構造、市民社会と国家という唯物史観の諸概念は、ルフェーヴルにとつて空間と生産の一体化された次元においてとらえられるべきものとなる。これらの諸概念は、それぞれが切り離されて別々に分析されるべきものではなく、空間の生産において統一的に把握されるべきものとなる。まず土台があり、その上に上部構造があるのではなく、空間の生産において土台と上部構造が相互に関係するそのあり方が問われることになる。生産諸力、土台、市民社会が規定的で、生産諸関係、上部構造、国家が被規定的だという理解はもはやなりたたないし、後者が前者に反作用するという説明でも不十分なのだ。そうではなく、空間の生産における両者の過程的運動が問われることになる。このルフェーヴルの認識は、ポスト・マルクス主義が「総過程的媒介としての政治」(平田清明 [1993]) としてとらえたものであり、グラムシがヘゲモニーの概念においてとらえたものと通じている。ルフェーヴルが『空間と政治』で問うた政治の概念は、いわゆる上部構造としての狭義の政治ではなく、空間の生産を組織する実践の概念としてとらえられねばならない。

二 空間の生産と身体の所作

作品と生産物の特異な関係によって新しい空間が生産される。この視座は、生産と空間の双方を身体の所作による生きられる経験の次元においてとらえかえすことを可能にする。空間は芸術家個人の意識的な活動の成果としての作品ではなく、空間を生きるひとびとの共同の社会感情、集団的記憶、慣習や伝統によって生成してくるものであり、生産も、物質的な生産活動だけでなく、社会諸関係の生産、夢や認識や幻想の生産をふくむこむものとなる。

『空間の生産』以前の日常生活批判、都市革命論において、ルフェーヴルは都市の空間を言語によって解読されるテキストとみなしていた。だが、『空間の生産』では、空間がたんに言語によって解読されるテキストであるだけではなく、ひとびとの生きられる経験とともに生成してくるものとして把握されるのである。ルフェーヴルは、〈空間の生産〉をそのような意味でとらえる。

「空間は解読されるよりも前に生産されたのである。空間は解読され把握されるために生産されたわけではなく、むしろ特定の都市環境のなかで身体と暮らしを有するひとびとによって生きられるために生産されたのである」(ibid.: 邦訳二二〇―

二二二頁)。

言語記号による空間の解読は、むしろ空間の生産がおこなわれたあとからなされるのであり、この空間の解読という行為には、人の目をくらましたり、特定のメッセージを押しつけるという政治戦略がふくまれる。空間の解読は、生きられる空間の生産を包み隠し、転移させ、不明瞭にする。したがって、記号による空間の解読も、空間の生産のひとつの次元ではあるが、この次元は身体の生きられる経験による空間の生産の地平から再定位されなければならない。

空間と身体は不可分である。なによりも、生命体の身体自身が、脳、筋肉、性器などの身体的器官によって空間的に構成されるし、それらの器官によるエネルギーの使用が身体の内部空間と外部空間とともに組織する。身体は自己の内部と外部とともに空間的に組織する。その意味で、身体は「空間的身体」(ibid.: 邦訳二九〇頁)である。したがって、空間と身体との関係は、容器のような入れ物とその入れ物に入る物体のような関係ではない。身体の所作とともに、身体の内部空間と外部空間がともに発生してくる。身体の内部と外部の仕切り自身が、あらかじめ存在するのではなく、身体の活動とともに生み出されてくるのだ。

だから、ルフェーヴルは、身ぶりはそれに適合した空間の生産をかならずともなうことを強調する。

「身ぶりはさまざまな空間を生み出す。身ぶりによって、身

ぶりのために、さまざまな空間が生産されるのである」(ibid.: 邦訳三一八頁)。

スポーツや戦争といったひとびとの身ぶりは、競技場、体育館、武器庫、戦場、という空間と不可分であり、キリスト教の信仰の身ぶり(折り、ミサ)は、教会の周歩廊、修道院のクロイスター「中庭を囲む屋根付き列柱歩廊」の空間と不可分である。

身体的所作と空間との不可分性は、人間にとどまらない。動物の身ぶりが空間と不可分な空間的身体の実践である。

「蜘蛛は生産し、分泌し、空間を占拠する。…蜘蛛による空間の生産は、まず身体の生産から始まり、「住まい」の生産的な分泌にまでいたる。…蜘蛛は人間集団と同様に、すでに空間を仕切り、視覚にもとづいて方向を定める。…だから蜘蛛や甲殻動物と同じように、あらゆる生きた肉体にとつてもっとも基本的な場と空間の目印を設定するのは、なによりもまずその身体である」(ibid.: 邦訳二六二―二六三頁)。

樹木が何十年、何百年もかけて作りだす年輪、貝がつくりだす渦巻き状の貝殻模様、これらは空間的身体の事例である。樹木や貝の生長とその生長が作り出す空間とは、そもそも不可分なものなのである。科学者や芸術家が年輪や貝殻の渦巻き模様を数学的に解析したり、審美的に鑑賞することも空間の生産活動に含まれるが、それは記号による解読、あるいは象徴によ

る美的生産という二次的・副次的な活動にほかならない。

それゆえ「(社会) 空間の総体は身体から生じてくる。空間は身体を変容させて身体を忘却するほどになり、また空間はみずから身体から切り離して身体を殺害するほどになるのであるが、たとえそうであっても空間は身体から生じてくるのである」(ibid.: 邦訳五七八頁)。

そうすると、空間の組織化を身体のリズムから解き明かすという課題が生じてくる。身体のリズムは外界の刺激を感受するという活動と外界に働きかける労働および表象という活動を含むが、この両者がともに空間を組織する。身体における五感のリズムが、空間の成層をかたちづくる。こうして「受動的な身体(感覚)と能動的な身体(労働)は、空間において一体となる」(ibid.: 邦訳五七八頁)。つまり、空間が「身体の秩序」(ibid.: 邦訳五七八頁)となるのである。

この空間的身体という視座こそ、ルフエーヴルの社会空間批判の根源的基軸である。こんにち、わたしたちは社会空間を身体と無縁な強大な権力として感じている。巨大ダム、都会のタワービル、高速道路網、高速鉄道網、飛行場、大型ショッピングモール、日常目にするこれらの巨大建築物は、ひとびとの身体とは無縁な、身体の外部にそびえ立つ強大な力となって空間全体を制圧している。だが、それらの強大な力は、人間社会の外部に由来するパワーではない。それは、科学技術・生産諸手

段を媒介にしたひとびとの社会的労働の成果にはかならない。科学技術も、社会的労働も、それ自身が人間の身体の所作から発するものにほかならない。科学技術は思考する身体の所作であり、社会的労働は筋肉・神経などの身体エネルギーの支出であり、かつ身体相互のコミュニケーションの活動である。だから、身体にとつて疎遠に見える空間も、その原初においてやはり身体と不可分な関係にある。

それらの空間は、ひとびとの身体的所作から発している。だが、商品の価値が私的諸労働の社会的関係の物象化された姿態（抽象的人間労働の凝結）であるにもかかわらず物に内属する自然力であるかのように表象されると同じように、巨大建造物も、空間も、ひとびとの生きられる経験とは無縁な客観的で物理的な力として自存しているかのように表象される。

われわれが問うべきは、身体的空間がいかにして身体を圧倒する物神化された空間へと転換するのか、この過程を究明することである。その究明のために、ルフェーヴルは空間の生産の歴史をたどろうとする。

マルクスは、資本の巨大な生産諸力の源泉が、賃金労働者の集合労働力にあることを洞察した。われわれの日常目にする動きは、資本という物象が、あるときは貨幣、あるときは商品、あるときは生産資本というすがたをとつて変態を遂げつつ価値を増殖する運動であるが、この物象の運動を通して私的諸労働

の無数の社会的・協同的連関が組織される。工場内部では、無数の個別諸労働が資本家の指揮の下に共同労働（工場内分業）を組織することによって、また工場の外部では無数の商品が市場で取引されることによって、社会的分業連関が組織され、ひとびとの社会的・協同的労働が資本という物象の力となって発現する。わたしたちはそのようにして社会の富をGDP「国内総生産」という物象化された数値で表象するのである。

資本という物象の自己運動の源泉には、商品形態がある。労働生産物に価格という記号を付与することによって、価格が社会的交通能力を保持し、商品の社会的諸関係を通して私的諸労働が社会的な関係を結ぶ商品世界では、その私的諸労働の社会的諸関係が物象に付与された数字＝価格の力であるかのように表象される。商品物神というこの表象＝錯視こそ、資本の巨大な生産力の始原にあるものである。

ルフェーヴルは、マルクスが解読した（商品の物神崇拜）を空間のうちに読み込む。空間がはらむ強大なパワーは、人間の身体的所作にその源泉をもち、その所作が無数の社会的諸関係、あるいは階級的諸関係を介して空間の力として結晶する。ルフェーヴルはこの魔術を解読しようとする。そして、空間がはらむその魔術を「空間の物神崇拜」と命名する。

この魔術によって「空間は空間」「それ自体」として扱われ、空間そのものの畏にはまりこむのである。空間領域の畏、空間

の物神崇拜の罨がそれである」(D. J. 邦訳一五一頁)。同じようにして、ルフェーヴルは、社会空間の圧倒的で強大な力を生み出す始原にあるものが空間的身体にあることを暴き出す。マルクスが資本制社会における富の原基形態を商品に見いだしたように、ルフェーヴルは社会空間の原基形態を空間的身体に見いだしたのである。

三 空間の言語論的解読から、生きられる経験による空間の生産へ

ルフェーヴルは、『日常生活批判2』(一九六二年)において、農村や都市の社会のさまざまな類型が発生してくる社会の意味場を言語水準の多様な位相から解読する試論を提示する。かれは社会の意味場を、信号、記号、象徴、イメージの四つの言語水準に区分けする。

信号は、ひとびとに一定の行動を支持したり禁じたりする。交通法規、道路標識、モータース信号のような言語水準がそれで、信号の受け手は、まったく受動的に画一的・機械的な反応を繰り返す。それは恒常性、反復性、自動性を特徴とする言語水準である。機械生産、商業取引、市場経済の発展がこの言語水準の社会領域を飛躍的に拡張した。

記号は、ひとに行動の指示や禁止を伝えるだけでなく、一定

の意味を伝える。その意味は記号間の差異の体系を通して生産される。たとえば、聖書に刻まれたキリスト教の教義体系は、記号の水準にある。

象徴は、記号に随伴する多義的な意味、あるいは記号が喚起する情動である。キリスト教の教義体系が記号であるのに対して、この教義体系が随伴する祈りや恐れや畏敬の感情は、この象徴の水準にある。

イメージは、既存の記号や象徴のシステムを解体して、新しい意味や情動を生産する言語活動の創造的次元を意味する。それは言語活動のもっとも根源的な水準である。

すべての社会には、この四つの言語水準が作動するが、社会の諸類型は、これらの言語水準のいずれの水準が支配的であるかによって決定される。伝統的な農村社会は、象徴的水準が支配的な社会である。古代都市、中世都市は、記号と象徴がたがいに均衡をとりつつ、都市空間の総体が作品として生産された社会である。これに対して、近代の産業都市は、記号と信号との均衡の上に成り立つ社会であるが、産業の発展とともにしだいに信号が優位になっていく社会である。

そして、産業都市の進展とともに醸成される都市社会は、産業都市において抑圧されていたイメージの水準が支配的なものとなる社会である⁶⁾。

このような言語論的解読に対して、ルフェーヴルは『空間の

生産』になると、言語活動の複合的水準を磁場とする社会の意味場の解読を、身体的実践の水準へと掘り下げていく。それはなぜか。言語活動の生産能力の源泉は差異を生産することにある、そして、この差異を生産する活動の根源にあるものこそ、身体の身ぶりリズムだからである。

「身体の謎とは、…反復にもとづいて、すなわち（直線的・循環的な）身ぶりリズムにもとづいて（無意識のうちに）差異を生産する能力にある」（ibid. 邦訳五六六頁）。

だから、いまだ発話能力をもたない幼児であっても、身体の所作によって差異を生産する活動をおこなっている。

「幼年時代と幼児の身体には、言語以前の身ぶりの能力が、すなわち具体的に実践し「操作する」能力が存在するといえる」。だから「身ぶりは言語活動だと言っことが出来る」（ibid. 邦訳三一五頁）。

身ぶりが言語に先立って言語的实践としての意味を有するがゆえに、言語的实践よりもさらに深部の位相に身体的実践が定位され、身体的実践の視座から言語的实践の複合的水準がとらえかえされる^[7]。

こうして、差異を生産する身体の能力の視座から、空間の生産を構成する三つの概念が検出される。それが、「空間的实践」「空間の表象」「表象の空間」の三つの位相である。

「空間的实践」とは、身体の感覚的活動による空間の生産で、

労働の現場と私生活の場と余暇の場を結びつける都市の現実を生産する身体の感覚的活動を意味する。

「空間の表象」は、科学者、経済計画立案者、技術官僚、社会工学者などによって「思考される空間」（ibid. 邦訳八二頁）の次元であり、生きられる経験が（思考する）という行為に還元された次元の空間である。この空間は記号および信号という言語水準と結びつく。

「表象の空間」は、「映像や象徴の連合を通して直接に生きられる空間」（ibid. 邦訳八三頁）であり、そのような空間を生産するのは、住民、ユーザー、芸術家、作家といったひとびとである。この空間を生産する活動は、象徴やイメージの言語水準と結びつく。

日常生活批判および都市論の考察においては、諸種の農村や都市の社会を類型化して認識する基本的な視座が言語の複合的水準であったのに対して、『空間の生産』では、身体の（感覚的活動）、（思考する身体）、（生きられる身体）といった身体的実践の位相が空間を構成するモメントとして検出される。身体と空間が一体となった空間的身体の三つの位相が設定され、信号、記号、象徴、イメージといった言語活動の各水準は、空間の身体を生産を媒介するものとして定位され直す。

そうすると、言語活動の水準による社会認識では明確にしえなかつたことがみえてくる。つまり、記号の水準が支配的な近

代社会（産業都市）とは、差異を生み出す身体を抑圧し身体を殺害する社会である、ということがみえてくる。

「生命体の肉体的身体もそうであるが、社会の空間的身体も、欲求の社会的身体も、「抽象的身体」や記号の「身体」（意味論的・記号的な身体、つまり「テクストの」身体）とは異なっている。そのちがいはつぎの点にある。つまり社会の空間的身体と欲求の社会的身体は、差異を生み出し、差異を生産し、差異を創造することなしには生きられないのである。この身体にそれを禁ずることは、身体を殺害することである」（ibid. 邦訳五六六―五六七頁）。

「空間の表象」、つまり記号の水準によって支配された空間は、身体を抽象化し、身体の差異を生産する能力を著しく抑圧し、身体を殺害する。そこから、生きられる経験にもとづく空間的身体の復権という社会空間批判の展望が開けてくる。

四 身体と空間の抽象化―記号としての商品から記号としての空間へ

では、近代の空間において空間的身体という身体感覚が消え去り、空間と身体の結びつきが失われ、空間が客観化して、身体とは無縁な抽象的枠組みへと変貌したのはなぜなのであろうか。身体が空間とのつながりを喪失し抽象的な存在と化したこ

とと、空間が抽象的な枠組みになったこととは密接に関連している。

近代の空間は記号あるいは信号の言語水準が支配し、ひとつの身体的所作においては、思考する身体、あるいはたんなるエネルギーとしての身体が支配的となる。日常生活においては、ひとつの生きられる経験が衰弱し、思考する身体が前面に躍り出ると、空間は生きられる経験の身体によってではなく、思考される身体によって生産されるようになる。その結果、空間はユークリッド幾何学の無機質な枠組みとなり、建築物はファッサードと視覚化の論理が支配し、男根崇拜を象徴する垂直の高層ビルや塔が支配する空間となる。

空間が記号によって支配されるのは、ひとつの身体が記号にむしばまれ抽象化していくことと並行している。空間を記号として表象し空間を言説によって組み立てる科学者、都市計画家、建築技師、行政官僚によって、空間は生きられる身体との繋がりを失い、抽象化され、幾何学的図式によって組み立てられるものとなる。つまり、空間が記号化される。このとき、ひとつの身体における生きられる経験の次元は縮減され、思考される身体が肥大化していく。医学によって分析された身体は、臓器、神経、血液、筋肉などに分割され、各臓器が機械の部品のようにみなされ、身体の全体が生きられる存在としてとらえられなくなる。内科、歯科、眼科、産婦人科に専門分化された医師は、

機械部品の修理工のようにして身体の各部位を修復する技術者となる。

近代世界におけるこのような空間の記号化と身体の記号化は、事物の記号化がもたらした帰結であった。事物が記号化するということは、事物が記号としてひとつひとつの社会的な関係を組織する能力をもつことを意味する。ひとつひとつが身分・地位・伝統・慣習などの人格的な関係によって結ばれるのではなく、それらの人格的絆を断ち切って私的な諸個人として自立するとき、事物が記号として立ち現れ、物象の社会的な関連を介してひとつひとつの社会的な諸関係が組織される世界が出現する。

このような空間の記号化と身体の抽象化について、ルフェーヴルがヒントを得たのは、カール・マルクスの商品の物神性論であった。マルクスの商品分析は、商品形態を言語記号として捉えることよって可能となる。言語記号とは、音の響き（意味するもの）とそれが心に刻印する観念（意味されるもの）の統一である。この記号の統一を生み出すのは、記号相互の差異である。音の響きを差異化し、その音の響きの差異を媒介として観念を差異化する運動を通して、一対の記号が生み出される。だから、原初にあるのは、記号を差異化する運動であり、それぞれの記号はその差異化の運動を通して生み出される産物である。

この言語活動の差異を生産する能力を商品が獲得する。資本

制社会において商品が富の元基形態をなすのはそのためである。商品は価格よって記号の表象能力を獲得する。商品に付与される価格という数字は、他の無数の諸商品との関係を表示する記号にほかならない。この数字よって、無数の異なった使用価値をもつ商品が共通の質（価値）をもち、ただ量的にのみ異なる存在へと変態を遂げる。だから商品の価値とは、価格という記号の表象能力のうちに宿る抽象的な支配力である。価格は貨幣で表現された価値であるから、貨幣の成立する以前にこの抽象的な支配力は商品に宿る交換価値として存在する。交換価値とは、ある商品の他の商品との交換関係 \parallel 量的な関係比率である。意味するものと意味されるものとの統一をなす言語記号が独立して自存しえないように、1個の商品が独立して価値をもつというのは形容矛盾である。価値とは商品と商品の関係のなかにしか存在しえないからである。

たとえば、交換価値とは、2着の上着 \parallel 3足の靴という使用価値相互の量的な比率である。だが、この使用価値相互の量的な関係比率は、それとはまったく別のある関係を表現する記号としての役割を演じている。というよりも、交換価値は、その別の関係を表現する役割を果たすからこそ、交換価値たりうるのである。別の関係とは何か。それぞれの商品を生み出す私的な諸労働相互の社会的な関係、がそれである。つまり、記号としての商品が富の元基形態をなす社会は、身分、地位、伝統と

いったあらゆる社会的な関係が崩壊して、すべてのひとが共同性を喪失した私的個人となり、みずからの私的労働の成果を市場で交換することによって社会的な関係を結ぶ社会状態を前提としている。そのような社会状態において、ひとびとは自己の労働生産物を商品として市場でたがいに交換し、商品を介してたがいに社会的関係を結ぶことを余儀なくされる。そのような社会状態が商品に記号という表象能力を授ける。

だから、マルクスは、商品・貨幣・資本という経済カテゴリーを言語記号とみなす。商品論では、商品が言語能力を備え、商品が語る。貨幣は「社会的象形文字」であり、そのひたいに数字を刻む。このような物象の言語能力（記号の表象能力）は、私的所有にもとづく私的労働および私的交換という体制が物象に授ける社会的能力にほかならない。その社会的能力が、商品の価値として、つまり、物象がそのうちにはらむ自然力として錯認されるのである。マルクスはこれを「商品の物神崇拜」と呼んだ。

このような社会状態において、私的諸労働の社会的関係は、商品という物象の社会的関係において転倒したかたちで表象されるほかない。

そのとき、人間の労働にどのような変化が生ずるのか。商品を生産する私的諸労働は、使用価値を生産する具体的な有用労働である。だがその私的諸労働が社会的な労働であることを

立証するためには、他の商品と交換される必要がある。その交換を通して、人間労働の具体的な有用性格は捨象され、抽象的な人間の労働一般へと還元される。へたんなる生理学的な意味での人間労働の支出一般」という抽象的で、みすばらしい姿で、私的労働は社会的な性格を手に入れる。この抽象的な人間労働が凝結した物体として商品は価値をもつことになる。商品の交換関係を介した私的諸労働の社会的関係が商品の価値として凝結したもの、「幽霊のような対象性」、それが商品の価値なのである。

商品世界に生きる人間は、この商品の価値を自明のものとして、私的労働と私的交換の活動を営む。だが、このような商品記号に媒介されたひとびとの日常の実践を通して、人間の労働が、そして人間そのものが、抽象化され、抽象的一般的価値という貧相な対象的性格へと還元される。

労働生産物が商品という記号となることによって、労働生産物が抽象化されると同時に、人間の労働が抽象化され、人間自身が抽象的な人間と化していく。労働市場で労働力商品が売買されるようになると、労働者はたんなる労働時間の人格的定在に還元される。たとえば、労働者は時給八〇〇円という抽象的労働時間を提供するだけの存在に還元される。それは、具体的な人間の生きられる身体が、思考する身体へ、さらに記号を処理する身体へ、そして反復する動作の身体（テイラー主義的労働

働者の身体)へと還元されていくことを意味する。つまり、人間の多様で具体的な身体的実践が、商品に対象化された抽象的労働へと解消されることを意味する。これこそ、記号による生きられる身体の圧殺にほかならない。

ルフェーヴルは、以上のようにマルクスが商品のうちに洞察した記号の世界を社会空間のうちに読み取る。ルフェーヴルが〈空間の生産〉というプロブレマティークを着想したのは、マルクスが商品のうちに洞察した記号の概念を社会空間のうちに読みこんだからである。ルフェーヴルは、空間が商品と同じように、記号の表象能力をはらむ「絶対的事物」になったということ、つぎのように語る。

「いかなる空間も、社会諸関係をともない、それをふくみ、それを包み隠している。空間は事物というよりもむしろ、事物(物および生産物)相互の一定の関係である。空間は絶対的な「事物」であるか、あるいは絶対的な事物になりつつある、とすべきなのであるか。恐らくそうであろう。というのは、あらゆる物が交換過程を通して自立する(つまり商品の規定を手に入れる)ことにより、絶対的な物になりつつあるからである。そして事実この傾向がマルクスの物神崇拜の概念を定義する」(ibid., 邦訳一四二頁)。

事物が絶対的性格を有するようになるのは、私的諸労働の社会的関係が事物自身の社会的な力として表象されるためである。

マルクスはこれを「商品の物神崇拜」と呼んだ。同じことが社会空間においても生じている。空間はさまざまな社会的諸関係をはらむと同時にそれを包み隠して空間の力として表象させる物神的性格を宿すようになる。

そうなったとき、商品がはらんでいた価値抽象の力が空間のうちに宿るようになる。記号によって支配され、価値抽象が作用する空間を、ルフェーヴルは「抽象空間」と呼んだ。抽象空間においては、空間こそが抽象を発動する場となる。

「抽象空間こそ、抽象の場であり、源泉なのである」(ibid., 邦訳五〇〇頁)。たとえば、テーマパークやショッピングモールの空間は、そこにおいてすべてのものが商品となり、すべての人間関係が物やサービスを売ったり買ったりする関係に還元される抽象空間にほかならない。

事物が記号として価値抽象の力を発揮する商品世界においては、人間の労働は抽象化されてはじめて社会的性格を獲得する。そして、その商品世界が抽象空間へと発展すると、抽象的人間労働は抽象空間において生産されるようになる。だが、ルフェーヴルは、言う。「抽象空間は抽象的労働に見合っている」(ibid., 邦訳四四四頁)、と。

五 人間労働と身体的所作

人間の実践は労働に還元されるものではない。労働は、記号という言語的実践の水準に位置する特異な実践である。人間の労働を、人間の身体的所作（身ぶり）の次元から位置づけてみると、このことが明らかとなる。身体の所作は、感覚的活動、思考する活動、表象し創造する活動、といった身体の多層的な実践からなりたっている。

人間の労働は、これらの多層的な実践のうちで、合目的性をもって人間が自然に働きかけてその目的を実現するという特殊な水準の実践を意味する。マルクスは労働過程論で、腕、足、手、顔といった自分の身体の自然力を用いて、外部の自然に働きかけ、自己自身の自然と外部の自然とともに変化させ、人間が設定した目的を実現する活動を〈労働〉と定義する。この活動は、たしかに人類のあらゆる歴史を貫く普遍的活動である。そして、この人間労働は、資本制生産においては、商品価値を生産する私的な労働として、さらには労働能力の商品化によって資本家のための剰余価値を生産する賃金労働という特殊な規定を帯びる。

だが、人間と自然の質料変換としての人間労働も、資本制生産における商品生産労働および剰余価値生産労働も、ともに記号という言語水準における人間の実践であることに変わりはない。

い。

ハンナ・アレント『人間の条件』は、人間の生命過程にとつて必要な活動を〈労働〉と呼んだ。この活動の産物は、ただちに消費されるから持続性、永続性をもたない。これに対して、生存に必要なものをつくる活動から解放され、活動そのものが目的となる活動を、アレントは「仕事」と呼んだ。仕事の産物は、労働の産物のように、ただちに消え去ることなく、持続性、永続性をもつ作品となる。さらに、古代ギリシャの世界では、思考する活動、人間の経験に関わる活動が尊重された。

このような多層的な人間の活動からすると、マルクスが『資本論』で描いた活動は、あくまで〈労働〉という水準に限定される。

マルクスは労苦としての労働から解放されたコミュニズムの世界において、仕事や芸術・創作などに関わる活動が生を享受する活動になることを展望したが、資本の運動法則を解明した『資本論』において考察の対象としたのは、〈労働〉という人間の特殊な実践的活動の水準であり、それ以外の多層的な実践は考察の対象から外された。

これに対して、資本制生産を抽象空間の生産という地平でとらえようとするルフェーヴルは、労働を超えた多層的な身体的実践の次元のなかに人間労働の水準を位置づけている。それは〈空間の生産〉という地平の設定が、人間の労働を超えた多層

的な実践を射程に入れるものだからである。そしてなによりも、空間が〈空間的実践〉、〈空間の表象〉、〈表象の空間〉という多層の実践をはらみ、そこに複合的で多様な社会諸関係をふくみこんでいるからである。

〈空間の生産〉という地平からマルクスの『資本論』の言説をとらえると、『資本論』の言説は〈空間の表象〉の次元に位置しており、記号の水準に限定されたものだ、ということがわかる。

ルフェーヴルが『空間の生産』において取り扱う空間と人間の実践とは、『資本論』の射程よりもはるかに広い。そして、この地平から資本概念を定位し直すことによって、『資本論』の射程を超えた資本の運動のダイナミズムと、そこにはらまれる変革の展望が開示されることになる。

資本の運動は〈空間的実践〉や〈表象の空間〉の次元にまで介入することによって空間のスペクトルを組織し、ひとびとの欲求の総体を価値増殖の運動へと引きずりこむ。そして、そのような資本の価値増殖運動への人間的欲求の誘導に抵抗する社会闘争がシチュアシオニストのような美学の運動を触発する。〈空間の生産〉の問題圏は、このような〈空間的実践〉や〈表象の空間〉の次元における資本のヘゲモニーと対抗的ヘゲモニーとの社会闘争の次元をも包摂する。つまり、生産現場を越えて、都市空間の次元で、空間への権利をめぐる階級闘争の地

平が切り開かれるのだ^[8]。

六 商品の暴力と抽象空間の暴力

社会空間が記号の抽象能力を手に入れたとき、この空間は恐るべき暴力を発動して、それまでになかった新しい世界を創造する。

「記号は：破壊力をもつ。というのも、記号は抽象力をもつからである。従って、記号は最初の自然とは別の新しい世界を建設する力をもっている」(ibid. 邦訳二一〇頁)。

記号が発動する暴力は、マルクス主義者によって資本の本源の蓄積の暴力として理解されてきた。資本制生産が支配する社会は、生産諸手段と労働との結びつきを切断して、抽象的労働を担う賃金労働者を大量に創出することを条件としている。こうして、土地をはじめとする生産諸条件と直接生産者との結びつきを解体する暴力(一六一―一八世紀にイギリスで領主および富農層が土地を牧場化するために農民から畑地や共有地を奪い取った囲い込み運動が、その典型的事例である)が資本制生産の出現に先だって発動され、この暴力過程の結果として、資本と労働の交換にもとづく資本蓄積過程が可能になった、という説明がなされる。

だが、見逃してならないことは、直接生産者と生産諸条件を

分離する暴力も、資本と労働の交換において作用する暴力も、ともに商品記号が発動する抽象の暴力を源泉としている、ということである。マルクスが資本の運動を究明する書物（『資本論』）の始原を商品に据えた理由はそこにある。生産諸条件と労働との分離を生み出す暴力の源泉は、商品がはらむ記号の抽象の暴力にある。つまり、ひとが私的所有者としてたがいに自立し、商品Ⅱ記号を介して社会的な関係を結ぶ世界こそが、その内部に恐るべき暴力を内蔵しているのである。

このことを洞察した希有な経済学者がカール・ポランニーであつた。ポランニーは『大転換』（一九四四年）において、あらゆる社会関係を、市場を通して組織しようとする「市場のユートピア」の思想を考察して、このユートピア思想が市場の外部におけるあらゆる社会諸関係を解体する暴力を呼び起こす、ということを喝破した。「市場のユートピア」の思考（経済的自由主義）は、市場における価格の変動を通して需要と供給を自動調整する仕組みにもとづく社会を創ろうとする。だが、「市場社会」と呼ばれるこのような社会を創出するためには、市場に先立つてひとびとの暮らしを支えているあらゆる社会的諸条件を解体する必要がある。

ポランニーが具体的事例として取り上げたのは、スピーナムランド制と呼ばれる救貧制度である。スピーナムランド制は、一七九五年にキリスト教区で生活に困窮した貧民を施設に収容

して救済するために設立された制度である。そして、この制度が、「市場のユートピア」を実現しようとするマルサス、リカードらの古典派経済学によつて激しい批判的となった。労働市場が賃金の自由な変動を通して労働力の需給関係を調整するようにするためには、スピーナムランド制は重大な障害となる。なぜか。貧民は困窮したとき労働市場で労働力を販売するのでなく、収容所に頼るから、労働市場に足を運ばない。そうすれば、労働市場の自動調整機能が働かない。

つまり、市場の自動調整機能が働くためには、市場に先立つて農民や労働者の生活を支えているあらゆる社会的保護の諸条件を解体しなければならない。そのようにして、農村共同体、あるいは相互扶助と連帯の制度が解体されていく。

この解体過程は、西欧社会の内部にとどまらなかつた。国際自由貿易制度が機能するためには、非西欧地帯における共同体の諸関係を破壊する必要があつた。インドをはじめとする非西欧地帯の植民地諸国・諸地域では、職人、農民の共同組織に対する暴力的破壊行為がおこなわれた。ポランニーはこの暴力の発動を「悪魔の挽き臼」あるいは「文化的破局」と呼んだ⁹⁾。

つまり、ポランニーは「市場のユートピア」の思考（これはルフエーヴルが言う「空間の表象」の思考にほかならない）が「悪魔の挽き臼」という記号の暴力を発動することを洞察したのである。資本―賃労働関係の創出よりも以前に、自由競争に

もどづく商品市場が成立するための条件として、ひとびとの協同的関係を解体する暴力が発動される、ということポランニーは洞察しているのである。

ポランニーは、人間の労働能力、土地、および貨幣という本来商品として生産しえないものを商品であるかのごとくみなして取引される市場のことを、「擬制商品市場」と呼んだ。だが、ポランニーは擬制商品市場がはらむ破局的暴力を感知することによって、商品形態が普遍的にはらむ暴力性をはからずも語り出したのである。商品形態が社会を破壊する破局的暴力を内蔵すること、これこそ、ポランニーが古典派経済学批判を通して語り出したものである。

つまり、人間労働という擬制商品だけでなく、すべての労働生産物が市場で商品として取引される商品世界が普遍的に成立するためには、その成立にとって障害となるあらゆる協同的諸関係の暴力的な解体が必要とされる。ポランニーはこのことを見破ったのである。

マルクスは商品にはられる価値という物象の超感性的な性質が、労働の独自の社会的性格から生ずると言う。つまり、私的労働にもとづいたがい孤立して行われる生産体制においては、私的諸労働の社会的関係が物の価値として転倒したかたちでたちあらわれる。

この物神的性格は、たしかに商品の交換的等値の関係が発動

する自由で平等な理念を生み出す根拠にもなる。ひとびとは身分や地位から解放され、たがい私的所有者として自由で平等な主体として関係するようになるからである。近代の市民権概念は、この商品の物神的性格に立脚してうちたてられた。

だが同時に、この関係は、市場という物象的關係を介さないひとびとの自由で平等な関係の組織化を妨げる。そして、ひとびとを、私的利益を追求する競争と敵対の関係の渦に投げ込む。そしてひとびとの連帯と相互扶助にもとづく社会形成を抑圧し、それを暴力的に解体する。

そのことを理解させるために、マルクスは商品の物神性を論じた節で、商品の物神性とは無縁の世界を例示する。漂流した孤島で孤独に暮らすロビンソン、農奴と領主、家臣と封主という人格的な支配にもとづくヨーロッパ中世、農村の家族の協働にもとづく共同体、そして、生産者の自由な連合にもとづくコミニズムの世界。マルクスは商品の物神性を論じた章で、商品の物神性とは無縁な社会体制をこのように例示することによって、商品が記号として抽象の力を発揮する世界が、商品交換を媒介することのない、このようなきわめて多様な協働連関の社会を暴力的に解体することによってのみ存立する世界であることを読者に伝えようとする。記号としての商品には、ひとびとの共同性を奪い去る暴力がすでに内包されているのだ。私的所とは、文字通り、共同性を奪われた状態を意味し、商品

世界は共同性を奪う暴力の発動をすでに内包しているのである。こうしてマルクスは、資本論最終章で資本の本源的蓄積の暴力を論ずる以前に、冒頭の商品章において、商品Ⅱ記号のうちにはらまれる暴力を洞察したのである^[10]。

七 抽象空間と死の欲動

ルフェーヴルは、マルクスが商品のうちに読み取ったこの記号の抽象の暴力を社会空間のうちに読み取る。記号の抽象の暴力が社会空間において発動されるとき、資本の蓄積過程が恐るべき勢いで始動する。社会空間が記号の抽象の暴力ではなく、人格的な権威、神の威信などによって組織されているときには、資本の蓄積過程は始動しない。統治者の権威を象徴する記念建造物を建てたり、統治者の権威を誇示する見せびらかしの消費がおこなわれる世界では、資本の蓄積過程の動態的運動は生じない。社会空間が記号の抽象によって支配されるようになるとき、価値増殖の欲望が資本の蓄積過程を発進させる。暴力が権威や威信のために発動されるのではなく、資本の価値増殖のために発動されるようになるのはいかにしてか。ルフェーヴルはこの問いに対する回答を、記号の抽象の暴力を発動する抽象空間の生産に求める。

だから、ルフェーヴルはこう問う。「資本主義はヨーロッパ

の中世を画期としている。それはなぜか」(ibid. 邦訳三八三頁)、と。中世以前のヨーロッパ世界においても、ヨーロッパ以外の世界においても、商品経済、貨幣経済、技術の蓄積、科学思想そして都市は存在した。だが、それらの条件が整っていてもかかわらず、近代資本主義は生まれてこなかった。中世のヨーロッパにおいて近代の資本主義が出現したのは、いかなる条件が準備されたためなのか。

ルフェーヴルは、この問いに端的にこう答える。「蓄積の空間」が出現したからだ、と。

「私の解答はこうである。西欧で一二世紀に出現した空間が、フランス、イギリス、オランダ、ドイツ、アメリカ、イタリアで少しずつ広がって、蓄積の空間となった。それが蓄積のゆりかごであり、蓄積の誕生地である。ではなぜ、いかにして蓄積の空間が生まれたのか。それはこの世俗化された空間が《ログス》と《宇宙》の復活から生じたものだからである」(ibid. 邦訳三八四頁)。

蓄積の空間に先立つ社会空間を、ルフェーヴルは「絶対空間」と呼ぶ。絶対空間は農耕や遊牧がおこなわれる空間で、農地や牧草地が聖化され魔術的・宇宙的なものとして表象され、空間が絶対的所与の存在として思い浮かべられる。空間は司祭や僧侶などの司祭階級と政治的階級が支配する宗教と政治の空間となる。絶対空間では、なにものによっても置き換えること

のできない宗教的・政治的な絶対的權威の象徴物が建造される。古代ギリシャにおいては、神殿、聖堂、邸宅、アゴラなどがそれであり、古代ローマにおいては、公共広場や国家の記念建造物がそれである。また絶対空間は、墓地や慰霊碑や地下室の世界といった「死の空間」をもつ。絶対空間においては、記号が支配する抽象空間とは正反対に、象徴が支配する。それゆえ、「表象の空間」が「空間の表象」を圧倒する。空間は無価値な等方向の幾何学的空間ではなく、象徴的な価値（神が支配する空間）をもち、倫理的道德（正しい方向、まちがった方向）をあらむ。

だが、このような絶対空間の中からしだいに、商業、市場といった世俗の空間が出現してくる。一二世紀に商業都市が出現し、絶対空間がうち砕かれる。絶対空間に代わって出現するのがロゴスと法（つまり、記号の論理）が支配する抽象空間である。抽象空間では、言語水準が象徴から記号へと移動し、商業と市場によって支配された都市の空間が知識と富を集積する容器となる。この抽象空間が一六世紀に資本の蓄積を推進するようになった二つの決定的な出来事を生み出す、とルフェーヴルは言う。

ひとつは、都市が農村を圧倒し、土地の支配に代わって貨幣の支配があらわれたことである。都市は都市住民のコミュニティの協働空間としてよりも、「計算と取引の合理性」(ibid.: 邦訳

三九一頁) が支配する空間となる。だから、ルフェーヴルは抽象空間の発祥地を「中世都市や都市住民の自治体「コミュニティ」よりも、むしろ市場広場と中央市場（そしてそこにならずついて回った都市の鐘塔や公共建築）」(ibid.: 邦訳三八五頁) に求める。

もうひとつは、国家による戦争行為である。一二―一九世紀のあいだに、西欧では百年戦争（一三三七―一四五三年、英仏間の戦争）、イタリア戦争（一四九四―一五五九年、イタリア支配をめぐるフランス対ドイツ、スペインの戦争）、各種の宗教戦争（一六一八―一六四八年の三十年戦争など）、仏蘭戦争（一六七二―一六七八年）、フランス革命、一七世紀後半から一八世紀半ばにおける植民地をめぐる英仏間の植民地支配のための戦争、といったおびただしい数の戦争が繰り広げられ、この戦争を通して蓄積の空間が徐々に押し広げられていった。

ヨーロッパに出現した世俗の空間が資本蓄積の空間として発展するために国家が発動した戦争の暴力は、資本主義の助産婦として決定的な役割を果たした。ここで発動された暴力は、それ以前の絶対空間において発動された暴力と決定的に異なっている。ヨーロッパ中世の時代の暴力は、封建制という身分秩序を維持するための暴力、つまり経済外的強制としての暴力であった。だが、戦争と革命において発動された暴力は、封建制を解体し、資本の蓄積を推進するという経済的役割を果たす。

ルフェーヴルは、〈経済〉と〈戦争〉を対立させて、〈経済〉を善で平和的なもの、〈戦争〉を邪悪で破壊的なもの、として対比する考えを手厳しく批判する。そのような対比は、「資本主義的蓄積における暴力の役割と、戦争および軍隊が生産力として果たした役割を、ともに無視している」(ibid. 邦訳四〇一頁)、と。

ルフェーヴルが注目する抽象空間の暴力は、マルクスが資本の本源の蓄積のモメントとして位置付ける暴力よりもさらに根源に位置する。それは近代西欧そのものを生産した原動力としての暴力にほかならない。

「戦争は何を生産したか。西欧である。つまり、歴史の、蓄積の、投資の、空間であり、経済領域を支配的な地位に押し上げた帝国主義の土台」(ibid. 邦訳四〇一頁)としての西欧を生産したのである^[11]。

近代西欧を出現させた暴力は、同時に西欧の外部に向けて発動される。そして、その暴力がグローバルな抽象空間を生産し、今日のグローバル資本主義の起源となる。西欧が非西欧地帯に発動した植民地主義と帝国主義の暴力は、非西欧地帯の絶対空間を解体し、市場と商業取引によって組織される抽象空間のなかに非西欧社会を強引に引きずり込む。一五世紀以降に誕生するグローバルな抽象空間は、「均質新世」、あるいは「コロンブス交換」(チャールズ・C・マン)と呼ばれる。世界商業に

よって均質化されたこの世界は、西欧発の抽象空間が発動する暴力によって創造された世界にほかならない。

ルフェーヴルは、暴力によって生み出された西欧が自ら切り開いた道を「死の欲動」の道だと言う。それは暮らしよりも資本蓄積を優位に置き、ただちに生を享受することよりも、資本蓄積のために生の享受を無限に先送りすることを選択する道だからである。それこそ、フロイトが「快原理の彼岸」において読み込んだ「死の欲動」にほかならない。

「一六世紀よりも前に、恐らく中世時代の奥深くで、あるいはそれよりも以前の古代ローマの衰退期およびユダヤキリスト教時代に、西欧社会は〈暮らすこと〉よりも〈蓄積すること〉を選択したのである。そのために、西欧社会は深い裂け目をつくりだし、〈享受すること〉[「快原理」]と〈節約すること〉[「現実原理」]の矛盾を生み出した。そして、それ以後の西欧社会は、この矛盾の惨劇によって強く締め付けられることになったのである」(ibid. 邦訳四七二頁)。

西欧のこの選択は、「死の欲動」を解き放つ道であった。西欧が選択したこの道をフロイトの〈死の欲動〉を解き放つ道だ、とストレートに表現したのが、M・ドスタレール、B・マリス『資本主義と死の欲動』[2009]である。

ドスタレールとマリスは、ルフェーヴルと同じ問いを立てる。「なぜ資本主義はヨーロッパで誕生したのか」(ドスタレール・

マリス、邦訳二二頁)、と。そして、この問いに対して、こう答える。

「資本主義は技術を蓄積のために迂回させることによって、人類の胸の中にしてしまい込まれてきた死の欲動への水門を広々とこじ開けたのではないだろうか」(同訳書、一二二頁)。

ルフェーヴルが抽象空間＝蓄積の空間のうちに読み取った〈死の欲動〉を、ドスタレール・マリスははざばり資本制的蓄積過程それ自身のうちに読み取る。資本の蓄積過程とは、現在の直接的消費を断念し、将来のより多くの消費のために現在の直接的消費を先送りする活動である。それは、同時に他者に対する攻撃的欲動を迂回させその攻撃的欲動を累積していく過程でもある。だから、資本蓄積という経済活動は、生を破壊するという死の欲動の目的を迂回させ、やがてその目的が巨大なスケールで発現する道へと通じている。

近代とともに西欧に出現した政治経済学は、この資本蓄積過程の運動を追認するのみならずその運動を推進する言説であった。それは、〈死の欲動〉の水門を解き放った西欧の歴史的選択を正当化し合理化するための言説として誕生したのである。だからルフェーヴルは政治経済学をこう位置付ける。

「政治経済学は「暮らすこと」よりも「蓄積すること」を優先した西欧の」この選択を合理化したのである。政治経済学が科学として誕生した時期は、社会的実践において経済的なもの

が勝利した時期と一致する。つまりそれは、利潤による、利潤のための蓄積への関心が支配する時期であり、たえず拡大し続ける蓄積への関心が支配する時期なのである」(Lefebvre *Ibid.*: 邦訳四七二頁)。

政治経済学は、ドスタレールとマリスが言う「技術を蓄積のために迂回させる」言説として誕生し発展を遂げることによって、死の欲動の水門をこじあげ、人類を死に向けて導く水路を押し広げたのである^[2]。

八 空間の生産と歴史の生産

——「遡及的・前進的方法」

空間の生産という概念の発見は、歴史の新たな生産を呼び起こす。というのも、空間の生産は、空間が生産される歴史過程の考察を不可避的に誘発するからである。空間の生産の歴史をたどる方法を、ルフェーヴルは「遡及的・前進的方法」と呼ぶ。

それはなぜか。この方法は「今日生起している事態からまず出発する」(*Ibid.*: 邦訳一一七頁)。今日の発展した資本主義においては、空間のなかで物を商品として生産するだけでなく、空間そのものが商品として開発され生産されている。そのことはしだいに誰もが気づくようになっていく。そこから出発して、社会空間がまだ自然空間のうちに埋没していた時代においても、

空間の生産がどのようにして行われていたかを解明する視点が提示される。絶対空間が支配していた時代には、空間を生産の概念で把握する社会意識は生まれてこない。しかし、たとえそうであっても、空間が生産されつつある現時点から遡及して、そのモメントを絶対空間の内に探り出すことはできる。そのようにして、空間の生産の歴史の諸契機が過去に遡及して検出されるのである。

それはマルクスが「人間の解剖はサルの解剖の鍵を握る」といったことに連なる認識である。人間の身体の解剖は、サルのみならずその発展のモメントを探り出すための契機となる。だが、そのことはサルのなかにあらかじめ人間へと発展する要素が備わっていて、その要素から目的論的に人間が生まれてきた、ということの意味しない。サルのなかにある人間へと発展する要素は、あくまで事後的にのみ把握できるものだからである。

「空間の生産は概念と言語活動の水準にまで達し、それが過去に反作用して、それまで理解されなかった諸局面や諸契機を暴き出す」(ibid.: 邦訳一一七頁)。

現在の概念と言語活動の水準から過去に遡及してその契機を探り出し、その契機がどのように今日の空間の生産へと前進するかを考察する。その遡及と前進の繰り返しを通して、空間の生産の歴史が究明されていく。「空間の生産」という概念を措定することによって、それまで見えてこなかった歴史の新たな

地平が開示される。

マルクスは、「生産一般」に代わって、「生産様式」という概念を確立することによって、生産一般のたんなる量的拡大の過程を記述するだけの歴史認識に代わって、異質な生産様式の検出、および異なった生産様式間の転換という歴史認識の地平を切り開くのであるが、それと同じことが、空間の生産においてなされたのである。

だが、ルフェーヴルは当初からこのような歴史認識を保持していたわけではなかった。一九四八年に上梓された『マルクス主義』では、人類の歴史を構成する二つの要素が挙げられる。第一は自生的な要素、つまり生物学的・生理学的・自然的要素、第二は反省的な要素、そして第三は仮象的・幻想的な要素である。人類の歴史は、生物学的、生理学的、自然的過程を基層として、その基層に人間が意識的・能動的・反省的に介入することを通して進展する。だが同時に、その反省的介入に対して幻想や虚偽にもとづくイデオロギー的介入もおこなわれる。しかし、最終的には反省的介入がイデオロギー的介入に打ち勝って、自然を合理的にコントロールする社会状態が訪れる。共産主義とはそのような社会状態である。このようにして、かつてのルフェーヴルは、歴史を、人間理性による自然史的過程の合理的制御の進展の過程として了解していた。

『空間の生産』のルフェーヴルは、そのような本質主義的歴史

史観をしりぞける。まず起点に据えられるのは、現代世界における〈空間の生産〉の批判的な解読である。そしてそこから過去に遡及して、そのような空間の生産をもたらした先行の時代における諸契機が探り出され、現在へと到る道程が前進的に辿られる。ルフェーヴルはこの「遡及的・前進的方法」によって、〈空間の生産の歴史〉を生産したのである。

九 身体の精神分析から身体のリズム分析へ

マルクスが商品を書号として解読しそこに物神的性格を発見した理論的営みは、商品の言語活動の中に目に見えない無意識の世界を読み込んだ、という意味において、〈商品の精神分析〉と呼ぶことができる。そのマルクスの手法に倣って、ルフェーヴルは空間にはまれる社会諸関係や矛盾や運動を読み込むことによって、〈空間の精神分析〉を試みたのである。空間には、商品の概念と同じように、夢が、象徴が、生と死の欲動が、はらまれている、ルフェーヴルはそのことを見抜く。

ルフェーヴルは、フロイトが身体のうちを読みとった生の欲動と死の欲動を空間的身体のうちに察知した。そして、空間がはらむ破壊的・暴力的性格が死の欲動から発するものであることを洞察したのである。

「空間もまた「ロゴスと同様に―引用者」この破壊的性格を

もつ：空間領域は、記号を介したコミュニケーションの場であり、分離の場であり、禁止の環境であるが、この空間領域を特徴づけているのは、生につきものの死への衝動「死の欲動―引用者」である。というのも、生が増殖するのは、生が自己自身と葛藤に陥り、自己自身を破壊しようとするときだけだからである」(ibid. 邦訳二一〇頁)。

ルフェーヴルは、西欧に出現した抽象空間が生が増殖過程のうちには破壊的・暴力的欲動を内包していることを察知した。抽象空間は、エネルギーの蓄積という経済原則にもとづく合理主義だけでなく、過剰、剰余、浪費、破壊という経済原則を超えた快原理の発現をもなっている。そして、ルフェーヴルは、このような経済原則をこえた快原理を読み取った哲学者として、スピノザ、シラー、ゲーテ、マルクス、そしてニーチエをとりあげる(ibid. 邦訳二六八頁)。とりわけ、ニーチエはフロイトの現実原理と快原理との弁証法的関係を「アポロン型」(調和・中庸を得た主知主義的な傾向)と「ディオニユス型」(奔放で激情的で自制心を欠いた傾向)との弁証法的関係においてとらえた。抽象空間には、エネルギーの蓄積およびエネルギーの合理的な使用の流れと、過剰なエネルギーの爆発的な放出とが渦巻く。生物と身体は、その内部に「過剰、陶酔、危険」を、「遊び、暴力、祭り、愛の可能性」(ibid. 邦訳二六八頁)を、ともにふくんでいる。

ジグムント・フロイトは、この快原理の過剰な展開のうちに「死の欲動」が潜むことを読み取った。抽象空間は利用可能なエネルギーをためこんで、破壊、自殺、暴力といったかたちでそのためこんだエネルギーを暴発させる。それは、ナルシズム、脅迫神経症、サディズム、自己破壊、精神病となつて発現する。

ルフェーヴルは、生の欲動にひそむ死の欲動を見抜いたフロイトを評価しつつも、同時にフロイトがその死の欲動を機械主義的に理解していると批判する。そして、フロイトの死の欲動をそのまま承認するのではなく、抽象空間の中に位置づけ直す。つまり、死の欲動は、抽象空間の原因や理由ではなく、抽象空間がもたらした帰結であり、二次的な作用だとみなすのである。

「空間には（つまりエネルギーが支出され散布され浪費される環境には）エネルギーの「否定性」が存在する」が、「死と自己破壊はあくまで結果であつて、原因や理由であるわけではない」。死の欲動は、「基本的エネルギーの不生産的使用ないしは悪用—いわば「濫用」—であり、「このエネルギーの内部抗争の関係の弁証法的な帰結なのである」（*ibid.* 邦訳二七二頁）。ルフェーヴルはこう主張して、抽象空間のダイナミズムがはらむ生の欲動と死の欲動の對抗関係を、新しい空間の生産のモメントとして定位し直そうとする。

つまり、ルフェーヴルは、死の欲動による破壊の暴力を制御

する道を空間的身体の可能性に求めようとする。そのために、フロイトの精神分析に代わつて、ルフェーヴルが提起するのが、身体のリズム分析である。ルフェーヴルはフロイトの欲動の概念を身体のリズムに読み替える。身体の器官は一定の規則性を有するさまざまなリズムをもち、しかもそれらのリズムが相互作用する。空間的身体はこれらのリズムの相互作用を通して空間を領有する。音楽のリズムは直線性と循環性をもつ。この身体のリズムを分析することによって、空間を領有する教育学に資することができる。だから、リズム分析は「身体の領有の教育学」であり。「空間的実践の教育学」（*ibid.* 邦訳三〇三頁）でもある。ルフェーヴルは舞踏と音楽をそのような教育学の実験領域としてとりあげる。そしてこう結論づける。

「やがては、リズム分析が精神分析にとって代わるであろう」（*ibid.* 邦訳三〇三頁）^[13]

空間の領有をめぐるリズム分析において、ロゴスとエロスの抗争が、つまり支配と領有をめぐる抗争が、検出される。抽象空間を生産するリズムは商品記号を組織するリズムであり、そこには反復と単調なリズムが支配する。そして死の欲動がしのびよる。この抽象空間に對抗する差異の空間では、象徴、多様性、創造のリズムが支配する。だからそこではロゴスとエロスとの対立が、支配と領有との対立が、フロイト流に言えば、「快楽の原理と現実の原理との争い」（*ibid.* 邦訳五六一頁）が

深まる。

一〇 抽象空間から差異の空間へ―都市革命の空間 革命への転換

抽象空間では、あらゆるものが均質化され一元化される。したがって、新しい差異を生産する欲望は抑圧され、禁じられる。抽象空間はあらゆる手段を用いて差異の生産を抑圧する。したがって、ここでは「書かれた文字の優位、地図の優位、視覚的なものおよび視覚的なものにおける平板化傾向の優位性」(ibid. 邦訳四四五頁)が支配する。

だがこの差異の抑圧にもかかわらず、抽象空間があらゆるものを包摂し、あらゆる社会諸関係を包み隠すなかで差異の生産があふれ出るのを押しとどめることはできない。

均質化の傾向を超えて、社会諸関係の複合化や多様なメッセージ、コードがあふれ出る。これこそ、抽象空間がその内部にはらむ根源的な矛盾である。この矛盾をはらんだ空間がしだいにその内部に差異を生産し増幅させて、抽象空間に代わる新しい空間(「差異の空間」(ibid. 邦訳一〇〇頁)とよばれる)の生産がその裂け目からたち現れる。抽象空間においては、商品価値を生産する抽象的労働が生産物を生産し、芸術家が芸術作品を生産する。生産物と作品は分離され、しかも両者はとも

に商品として取引されることによって抽象空間の生産に寄与する。

だが、生産物を生産する労働と作品を生産する芸術活動が、商品の抽象的価値の生産ではなく、使用価値の生産のために協働するとき、つまり両者がともにユーザーの実践になるとき、新しい空間の生産は可能となる。空間的身体は差異を生産することによってのみ生きることができ。差異を生産しない身体は、抽象的身体であり、死んだ身体である。つまり、空間への権利とは、差異を生産する空間的身体の権利にはかならない。

本書の末尾で、ルフェーヴルは〈差異の空間〉の生産への展望をつぎのようにまとめている。

「空間の生産過程が開口部を経て始まる。われわれはこの過程の方向づけをあきらかにしようとしてきた。この方向づけは分離と分裂をのりこえ、とりわけ作品と生産物の区別と分離をのりこえようとする。作品とは唯一のものであり、創造者や芸術家という「主体」の刻印を帯びた物であり、二度とやって来ない瞬間の刻印を帯びた物である。生産物とは反復されるものであり、反復する身ぶりの、それゆえ複製可能な身ぶりの成果であり、そして最終的には社会諸関係の自動的な再生産へとゆきつくものである。それゆえ近い将来において重要となるのは、可能性をとことんつきつめて、人類の空間を人類の集合的(類的)な作品として生産することである」(ibid. 邦訳六〇二頁)。

ルフェーヴルは、こう提起することによって、一六世紀のヨーロッパが戦争と暴力の成果として生み出した華麗なる芸術作品としての都市に代わる、地球的な規模での作品としての空間の生産を展望する。商人に代わって、都市の住民がユーザーとして作品の生産にかかわるような空間の生産の時代の到来が高らかに宣言されるのである。

かくして、都市革命は「空間の革命」(ibid.; 邦訳五九七頁)へと進展する。都市革命は空間の革命のうちに包摂される。それは、土台と上部構造、生産諸力と生産諸関係、市民社会と国家の双方を包み込み両者を媒介する政治の出現を意味する。ルフェーヴルはそれを「政治批判」および「政治的な領域の消滅」(ibid.; 邦訳五九三頁)と呼ぶ。狭義の政治的領域が消滅して、政治的なものが打ち砕かれ、それに代わって〈空間を生産する政治〉がたちあらわれる。

[1] 筆者は二〇〇〇年にアンリ・ルフェーヴルの『空間の生産』の邦訳書を上梓した際、邦訳書の末尾に「〈空間の生産〉の問題圏」と題するやや長文の訳者解説文を付した。それから一八年が経過したが、現時点から振り返って、ヘルフェーヴルの空間の生産が提起したものについて再論をこころみる。訳者解説文の執筆当時、筆者自身にとって十分に理解しえなかつた論点を視野に入れて再論したつもりである。今回の再

論の契機となったのは、昨年筆者がドスタレール・マリスの『資本主義と死の欲動』(藤原書店)の邦訳作業に取り組んで、フロイトの〈死の欲動〉概念がルフェーヴルの空間論に及ぼした影響について再認識したことが大きい。その視点からルフェーヴルの空間論を再読することは、同時に現在のグローバル資本主義が抱える深刻な危機的状況を深部から問い直す手がかりにもなるように思われる。

本論の構想は、二〇一七年一月二六日に横浜国立大学の都市空間研究会に招かれて報告した内容、および『季報唯物論研究』(二四三号)における特集「都市と空間の開放」におけるインタビュー「都市革命の空間論的旋回」(インタビューアー立花晃氏、斉藤日出治 [2018a] 参照)を通してすでに明確になったものである。筆者の問題意識を触発していただいたことについて、都市空間研究会および『季報唯物論研究』の関係者のみなさんに感謝申し上げたい。

[2] この身体への問いかけは、フロイトの精神分析に通じている。フロイトは「死の欲動」の概念を、身体の精神病理現象(肛門性愛)から説き起こす(フロイト「文化の中の居心地悪さ」を参照)。

[3] ルフェーヴルは一九六八年四月に日本を訪問し、雑誌『世界』で座談会に招かれる(ルフェーヴル、桑原武夫、河野健二、平田清明、多田道太郎「現代の技術と文明―東洋と西

洋の接点を求めて』『世界』二六九号、一九六八年四月)

ルフェーヴルは、この座談会において、日本社会が産業および技術の高度な発展と、伝統的な日常生活の次元との矛盾・対抗関係の中にある、とその印象を語り、さらにこの矛盾・対抗を貫いて「都市化による無秩序状態がみとめられる」(二五五頁)と述べる。そして、この都市の無秩序状態は、「われわれヨーロッパ人の想像力をこえた異常な事態」(二五六頁)だ、とその印象を語る。産業・技術の発展と日常生活とのこの対抗的矛盾は、ルフェーヴルがフランスの都市において、交換価値としての都市の発展と使用価値としての都市の衰退との関係として読み込んだものである。だから、その現象はフランスの都市にも看取できるものであるが、日本におけるそれはとりわけ「異常な事態」だと強調している。

日本の一九六〇年代は高度成長のまった中であり、都市化の波が急速に進み都市型生活様式が日本人の暮らしに浸透していった時期である。多くの日本人は、この都市化の動きを無批判的に受容し、それを「戦後復興」あるいは「日本の近代化」と肯定的に受け止めた。この動きに懐疑的なまなざしを向けた日本の思想家はきわめて希有であった。森有正はフランスから戦後日本の都市化の変貌をながめながら、日々めまぐるしく変わる東京の町並みに、戦前と変わらない日本を読み取る。「日本人は経験にもとづいて社会をつくっていない

い」と(「木々は光を浴びて」『森有正全集』五巻、一九七九年)。森が戦後東京の激変する都市のうちに日本人の経験の不在を読み取ったことと、ルフェーヴルが「都市化による無秩序状態」の異常性を読み取ったことは、同じ質の問題なのである。

ルフェーヴルは日本の都市を眺めながら、そこですでに〈空間の生産〉の問題関心を暖めている。たとえば、京都の町や家屋を観るときに、そこに空間についての考え方や世界観が日常生活のなかにさしはさまれている、と言い、たたみや家具などの空間の配列のなかにひとの身ぶりが意味作用をもってあらわれている、と語る。

〔4〕商品・貨幣・資本という物象の生産が、私的所有者の社会的関係、あるいは資本・賃労働関係といった社会諸関係の生産を意味することは、すでにカール・マルクスが『資本論』で洞察したことである。ルフェーヴルはこのマルクスの洞察をさらに進めて、空間の生産が物象の生産と同じようにして社会諸関係を生産することを提示しようとする。

だがじつはそれだけにとどまらない。生産概念が身体の活動という次元からとらえかえされるとき、マルクスが視野の外に置いた近代の社会諸関係を超えるひとびとの感性的活動、ひととひとの交歓、相互交通、協働、人間と自然のかかわりの多様な次元がそこにたちあらわれてくる。

〔5〕 回顧的分析については、本論の7章の「週及的・前進的方法」を参照されたい。

〔6〕 ルフェーヴルの言語の水準を情報の水準に読み替えて、人間社会を情報とエネルギーの水準から分類する社会Ⅱ歴史認識を提示したのが、ジャック・アタリの『言葉と道具』〔1975〕（邦訳『情報とエネルギーの人間科学』日本評論社）である。アタリは、人間の社会Ⅱ歴史が物質のエネルギー代謝とそのエネルギー代謝を媒介する複合的な情報水準によって構成されるものと考え、一定の刺激が一定の反応を引き起こすサイバネティック情報（信号水準の情報）、言語、知識、イデオロギー、宗教などの記号のシステムを構成する意味連関情報（言説水準の情報）、記号が随伴する多義的な象徴の情報（記号学的情報）、対話を通して相互行為を創造する情報（相互交通情報）。アタリは、この複合的な水準の序列的な編成においていずれの情報の水準が支配的なのかにしたがって、社会Ⅱ歴史を再構成する。近代世界は意味連関情報が支配的であるが、後期資本主義になるとサイバネティック情報の水準がせり出してくる。この支配的な情報の水準移動を通して、集権から分権への政治のありかたの転換が生じてくる。そしてこの転換を契機として、他者管理を正統性の原理とする社会が自己管理を正統性の原理とする社会へと突き進む可能性が拓かれる。その転換は、同時に利潤の極大化や交換価値を

自己目的とする生産体制を、生活の質の充実と使用価値にもとづく生産体制へと転換する契機となる。このようにして、アタリはエネルギーと情報の概念を方法論の手がかりとして、自己管理社会主義への政治的展望を提唱する。アタリのこの社会Ⅱ歴史認識は、ルフェーヴルの言語水準にもとづく社会の意味場の社会Ⅱ歴史認識を継承発展させたものと言えよう。アタリの本書について論究したのとして平田清明〔1980〕「自己管理社会主義への人間科学的接近」を参照されたい。

〔7〕 それゆえ、ルフェーヴルは言語学とその発展形態としての記号学が、社会や文化の認識に重要な貢献をすることを強調すると同時に、社会認識のすべてを言語学に還元することをきつく戒めている。一九六八年に来日した際の座談会での発言を引用すると、

「意味論や言語学や記号学の分析方法がこの点〔文化と記号の解説に―引用者〕大きく貢献してくれるでしょう。ただし、やはりまた、そうした方法を社会の総体にまで拡大してはならない、という条件を忘れてはいけません。」（二六八頁『世界』前掲、座談会）、この時点ですでにルフェーヴルは、言語学の地平を身体の深層の地平に向けて掘り下げる視点を確立していたことがわかる。

〔8〕 ギー・ドゥボール〔1992〕参照。

ルフェーヴルはマルクス『資本論』の言説が記号の水準の

世界を論じたものであることの意義と限界を見据えていた。来日した一九六八年の『世界』での座談会では、ルカーチの『マルクス主義美学のために』をとりあげ、マルクス思想を美学として論ずることに懐疑を呈し、「マルクスは西欧の合理主義者でした。彼の芸術感覚には非常な限界があります」（二二六頁）と言いきっている。『資本論』から美学論を引き出すことはできない、ルカーチはそれを無理に引き出そうとしている、と。

[9] 今日進行しているグローバリゼーションと呼ばれる過程は、ほかならぬ商品記号の暴力が地球のすみずみに発動されていく過程であり、一六世紀以降、西欧近代が非西欧地帯に行使した「悪魔の挽き臼」の現在進行形のすがたにほかならない。ポランニー『大転換』がグローバル資本主義の根源的批判の書であることを洞察した若森みどり [2011]、[2015]、および拙著 [2018c] を参照されたい。

[10] 商品の交換的等値の理念は、商品世界を超えた個体の解放と自由な関係をはぐくみ、それが資本制生産という歴史的制約を超えた人類史の地平を拓く。だが他方で、商品の交換的等置は、同時に、そのうちに人類を破局に追いやる暴力を発動し、人類を死に追いやるリスクをものはらんでいる。近代市民社会は、資本主義をのりこえていく力の源泉であると同時に、資本主義を破局に導く恐るべきリスクを内包する、と

いう両義的な性格をはらんでいる。これについては、拙論 [2018c] を参照。

[11] 抽象空間が発動するこの暴力は、過去のことではなく、たえず現在のに進行する。それは戦争というかたちをとらなくても、経済開発というかたちをとって遂行される。ダム建設は建設地の山村が長期にわたってゆつくりと生産してきた絶対空間を破壊し、絶対空間を構成する人と物を記号に変換する暴力を行使した。ダムが自然環境を破壊し、村人の強制移住によって暮らしを破壊することは指摘されてきたが、この破壊が抽象空間の発動に起因する暴力であることについては、看過される。ダム建設によるこの抽象空間の暴力を考察したジャーナリストの貴重なルポルタージュ、浅野詠子 [2017] を参照されたい。

[12] ルフェーヴルは、ヨーロッパ中世に出現した作品としての都市を、この戦争と暴力が生み出した産物として位置づける。作品としての都市は、かつての日常生活批判においては、二〇世紀に出現した工業品としての都市を批判する肯定的な基軸として位置づけられていたが、『空間の生産』では、抽象空間が発動する戦争と暴力こそが華麗な作品としての中世都市を生み出した、と結論づけられる。

「これらの紛争」「都市の周辺で激しく闘われる戦争」を通して、これらの紛争にもかかわらず、そしてこれらの紛争のゆえに、

都市は光り輝く。生産物が支配的な地位を得るにつれて、作品はその華麗さの極みに達する。実際のところ、都市はおびただしい数の個々の芸術作品を包み込んだひとつの壮大な芸術作品となったのである」(ibid., 邦訳四〇三頁)。

[13] ルフェーヴルは『空間の生産』の執筆後に、『リズム分析の要素—リズム認識序説』を著して、このテーマを掘り下げた。

参考文献 (「」は原書の刊行年)

- Arendt H. [1998] *The Human Conditions*, University of Chicago Press. 『人間の条件』志水速雄訳、ちくま学芸文庫]
- 浅野詠子 [2017] 『ダムと民の五〇年抗争』風媒社
- Attali J. [1974] *La parole et l'outil*, PUF. 『ジャック・アタリ [1975] 『情報とエネルギーの人間科学』平田清明ほか訳、日本評論社]
- チャールズ・C・マン [2015] 『一四九三——世界を変えた大陸間の「交換」』布施由紀子訳、紀伊國屋書店
- Debord G. [1992] *La société du spectacle*, Editions Gallimard. 『ギー・ドゥボール』スベクタクル社会』木下誠訳、ちくま学芸文庫]
- Dostaler G. / Maris B. [2009], *Capitalisme et pulsion de mort*, Albin Michel. 『ドスタレール・マリリス、齊藤日出治訳』資本主

義と死の欲動』藤原書店]

Freud S. [1908] *Charakter und Analerotic*, Sigmund Freud Gesammelte Werke. Nachtragsband zur Auffassung de Aphasien, 1972. 『性格と肛門性愛』道籐泰三訳『フロイト全集』九卷、岩波書店]

—— [1920] *Jenseits des Lustprinzips*, Sigmund Freud Gesammelte Werke. Nachtragsband zur Auffassung de Aphasien. 『快原理の彼岸』須藤訓任訳『フロイト全集』一七卷、岩波書店]

—— [1930] *Das Unbehagen in der Kulture*, Sigmund Freud Gesammelte Werke, Frankfurt am main, 1987. 『文化

の中の居心地悪さ』嶺秀樹・高田珠樹訳『フロイト全集』二〇卷、岩波書店]

平田清明 [1980] 『自己管理社会主義への人間科学的接近』『社会形成の経験と概念』岩波書店]

Lefebvre H. [1948] *Le Marxisme*, PUF. 『マルクス主義』竹内良知訳、白水社]

—— [1961] *Critique de la vie quotidienne*, II, L'Arc. 『日常生活批判2』奥山秀美訳、現代思潮社 (一九六二年)]

—— [1962] *Introduction à la modernité*, Editions de Minuit. 『現代への序説』上・下、宗左近・古田幸男訳、法政大学出版社]

——[1974] *La production de l'espece, Anthropos, 1974* [『空間の生産』齊藤日出治訳、青木書店、二〇〇〇年]

——[1992] *Elements de rythmanalyse, Editions Syllepse.*

Marx K. [1868] *Das Kapital*, 『資本論』第1巻、長谷部文雄訳、青木文庫

森有正 [1979] 「木々は光を浴びて」『森有正全集』五巻、筑摩書房

Polanyi K. [1944] *The Great Transformation, Farrar and Rinehart* [『カール・ポランニー』大転換』野口建彦・植原学訳、東洋経済新報社]

齊藤日出治 [1991] 「都市の物象化と歴史認識」『物象化世界のオルタナティブ』昭和堂

——[2018a] インタビュー「都市革命論の空間論的旋回」聞き

手立花晃『季報唯物論研究』一四三三号

——[2018b] 『グローバル資本主義の破局にどう立ち向かうか』河合ブックレット

——[2018c] 「グローバル資本主義の精神分析」『近畿大学日本文化研究所紀要』第1号

——[2018d] 「商品の物神性と死の欲動」『季報唯物論研究』

一四四号

若森みどり [2011] 『カール・ポランニー—市場社会・民主主義・人間の自由—』NTT出版

——[2015] 『カール・ポランニーの「経済学」入門』平凡社
新書